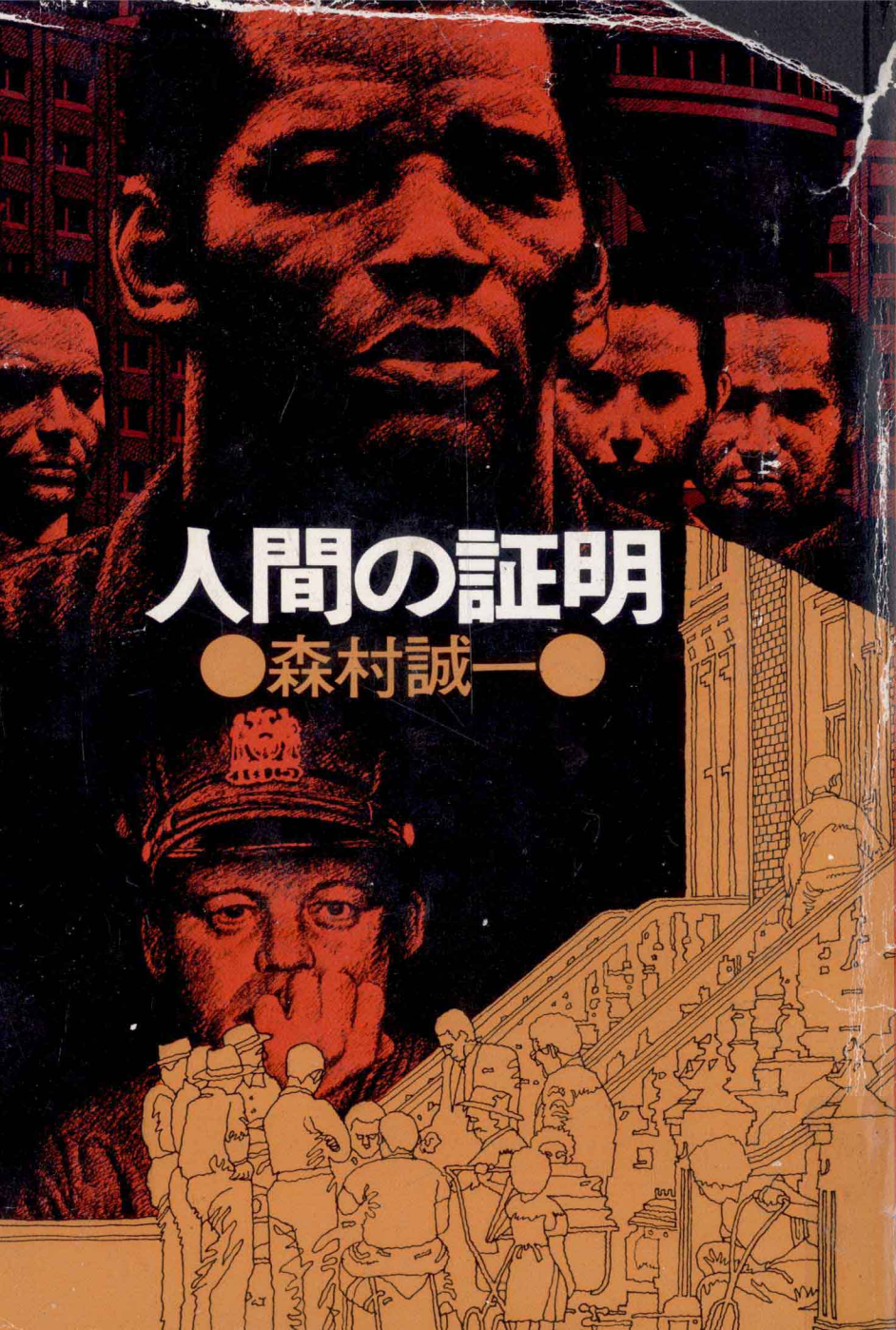




人間の証明

● 森村誠一 ●

人間の証明

●森村誠一●

人間の証明

森村誠一



昭和五十一年一月二日 初版発行
昭和五十二年十二月十日 二十四版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二―十三
⑧〇三二六五〇七一一大代表
⑨東京千一九五二〇八〇一〇二

旭印刷・宮田製本

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872155-0946(0)

目次

エトランジェの死.....	七
怨恨の刻印.....	六
謎のキイワード.....	四
不倫の臭跡.....	三
底辺からの脱出.....	二〇
失踪の血痕.....	二八
断絶の疾走.....	三九
過去をつなぐ橋.....	五四
忘れじの山宿.....	一七〇
道具の反逆.....	二九

おもかげの母	二六
遠い片隅の町	二五
決め手の窃盗	二二
巨大な獄舎	二九
救われざる動機	三三
落ちた目	三五
人間の証明	三九
あとがき	三七

装幀 日暮修一

人間の証明

エトランジェの死

1

その男が乗って来たとき、だれも注意を向けなかった。世界各国から多種多様の人間が集まって来るその場所では、異邦人の彼も、さほど目立つ存在ではなかった。

黒人ではあるが、肌の色は、ややうすい。褐色に近い肌をしている。髪は黒く、あまりちぢれていない。顔の造作もどちらかといえば東洋人に近い感じである。黒人にしては、背は低いほうだ。年齢は二十代か、ひきしまった精悍な体軀をしているが、この季節にはまだ早いマキシがかったバーバリのコートで体形のほとんどを隠している。

どこか具合でも悪いのか、彼はひどく重そうな足取りで、エレベーターを待っていた一群の人々の最後尾から、搬機に乗り込んで来た。

このエレベーターは、建物の最上階にある『スカイダイニング』への「急行」である。四十二階、百五十メートルの高さをノンストップの場合二十八秒で上ってしまう。二十階まで直行し、それから上は客のリクエストによって停める。

「ご利用階数をおしらせ願います」

「コール・ユア・フロア・プリーズ」

矢^{がすり}絨^{じゅう}の和服を着た美しいエレベーターガールが日英両国語で客に呼びかけた。搬機^{クレーン}は音もなく垂直の空間を移動する。搬機の床には毛足の長い絨毯^{じゅうたん}が敷きつめられ、それがいっそうに周囲からの柔らかな隔絶感を促す。

すべてスカイダイニングへおもむく客ばかりと見えて、ケージはノンストップで上っていく。定員の約七割の客には、外国人の姿のほうが目立つ。みな無言で移動するインジケーターサインを見守っている。いずれも金と暇に恵まれて、今宵の豪華な食事を楽しみに来た人々のように見えた。ただ一人の例外を除いては。――

エレベーターは、ほとんど振動を客に伝えることなく、最上階に着いた。するすると開いたケージのドアの前で、タキシードと蝶タイに身をかためた食堂長^{じやうぢやう}が恭しく頭を下げた。

「お待ちせいたしました。スカイダイニングでございます」

エレベーターガールも優雅に告げて、客を送り出した。客たちは、豪華なダイニングルームのたたずまいに、それぞれ格好をつけてケージから降り立った。

この場所で食事をできる人間は、選ばれた者だけである。彼らが一食に費す費用で、百人の餓えた人間を養えるだろう。だがそんなことを考える者はいなかった。ここで要求されることは、その食事に相応する服装とマナーと、そして代金を賄^{まわ}える資力である。客が空腹であるかどうかは問題ではなかった。食事が豪華であればあるほど、食物のもつ本来の目的から逸脱してくる。だが、人々はその矛盾にほとんど気がつかない。

ケージは、空になった。いや一人だけ残っている者があった。ケージの壁に寄りかかったまま下りて行こうとしない。最後に乗り込んだバリコートの黒人である。目を閉じていた。

「お客様」

エレベーターガールが声をかけても、いっかな動かない。立ったまま眠ってしまったのかとおもいか

けたエレベーターガールが、どうもそうではない様子に気がついた。いままでは他の客のかげに隠れてわからなかったが、様子がおかしい。褐色の肌のために、よく顔色を読み取れないが、表情というものがまったくない。ポーカーフエースの無表情とはちがって、死相が貼りついたようなのだ。

このときになって彼女は、その男がひどく場ちがいなのを悟った。羽織ったバーバリのコートは、垢で黒光りしている。袖や裾は、すり切れて、繊維の先端がけば立っている。所々に泥のようなものがこびりついている。刈り上げた頭髮も埃まみれで、かさかさ乾いた皮膚に濃いた不精ひげが目立つ。コートの下の胸元を底^はうように手で押えている。

とても優雅な夕食を楽しみに来た格好ではなかった。

——きつとまちがえて、乗り込んでしまったんだわ——

種々雑多の人間の集まる所だから、こんな人間がまぎれこんでも不思議はない。この男は自分のまわがいに気がついたので、下へ戻ろうとしているのだろう。

エレベーターガールは、おもいなおして、食堂前のロビーで待っていた客に「下へまいります」と呼びかけようとした。

バーバリコートの男が動いたのは、そのときである。男は背をケージの壁にもたせかけたまま、ずるずると膝を折った。尻もちをつくような形でケージの床に尻を落とした男は、グラリと前かがみに上体を折った。

いきなり自分の足元へ倒れかかってこられたので、エレベーターガールは小さな悲鳴をあげて、飛び退いた。しかし、すぐに自分の職務に気がついて、「お客様、いかがなさいました」と声をかけてたすけおこそうとした。この時点では彼女も、男が軽い貧血でもおこしたぐらいに考えていた。わずか二十八秒で百五十メートルも上ってしまうエレベーターでは、時々こういう症状を現す客がいたからである。だが、彼女は言葉を最後まで言えなかった。男をたすけおこそうとしたはずみに、いままでコートに

よって隠されていた胸元が目に入った。一瞬、赤い色彩が彼女の目の中で炸裂したように感じた。同時にこれまで男が立っていた足元のベージュ色の絨毯が、赤黒く染色されているのに気がついた。

エレベーターガールは、今度こそ抑制をけない本物の悲鳴をあげて、機内から飛び出した。ロビーにいた客が仰天した。食堂長やウェイターが飛んで来た。男はすでに死んでいた。ナイフが顎下（柄の根元）まで胸に突き立てられていた。突き立ったナイフが蓋の役めをしたために、あまり血も流れていない。男がここまでの行動能力を保存したのも、ナイフを引き抜かなかったからかもしれない。

大騒ぎになった。直ちに警察へ通報が為された。

千代田区平河町の東京ロイヤルホテルのスカイダイニングルームに外国人刺殺体が転りこんだという急訴を一一〇番経由でうけた警視庁通信司令室は、直ちに現場付近を警邏中のパトカーと所轄の麹町署に連絡した。

麹町署とロイヤルホテルは目と鼻の先なので、所轄署員は、パトカーとほとんど同時に現場へ着いた。現場は同ホテルが最大の売物にしている四十二階にあるスカイダイニングである。時間もちょうど午後九時を少しまわったところで、外来客が多くなる時間帯であった。

地上最高（高度、値段、料理において）をホテルが自負する超デラックスなダイニングルームの、最も優雅な時間帯に、血まみれの死体が転りこんだのであるから、ホテル側の動転は、まことに救い難いものがあった。

まず、客が蟻の巣をこわされたような騒ぎになった。血のしたたるようなステーキに舌つづみを打っていた客は、ナイフを胸に突き立てられ、血まみれになった死体の闖入の報せに、せっかく胃に入れた血肉を危うく吐きそうになった。実際に吐いた客もいた。

婦人客が、先を争って逃げ出した。だが逃げ出した先のエレベーターホールを、凄惨な死体が塞いで

いたのである。子供が泣きだした。つられて泣きだした親もいる。優雅な食事どころではなくなった。客の混乱をよそに、駆けつけた警察陣は、冷徹に検証を進めていた。だがオーソドックスな現場検証とも、おもむきを異にしていた。

被害者を運んで来たケージのエレベーターや乗り合わせた客の証言によって、被害者がべつの場所からやって来たことは、確かである。創傷の部位や、衣服の上から直接突き刺している点から、自殺とは、考えられない。また傷の状態から判断して、ケージ内部で刺されたものでもない。すると、被害者はどこかべつの場所で胸に凶器を送りこまれたのだ。

——その場所は、どこか？——

捜査員は、検死の係官を残して、犯行現場を探し求めながら被害者の足どりを溯^{さかのほ}った。

被害者の傷の程度から見て、あまり遠方からやって来たとはおもわれない。犯行現場はきっとこの近くにある。——捜査陣は、そう信じていた。

だが、捜査陣の目算は外れた。捜査員の丹念な搜索にもかかわらず、付近に犯行現場を見つけられなかった。捜査をはじめるにあたって捜査陣は犯行現場をホテルの内部にとらんだ。

ロイヤルホテルは、四十二階、客室総数二千五百を誇る超巨大ホテルである。収容客数四千二百名の他に、付設食堂や大中小七十の宴会場へ集まって来る外来客が多い。

これらの客の中に犯人が紛れこんでいたとすれば、その割出しには、かなりの困難が予想される。しかし犯行の現場がホテルの敷地内であれば、捜査範囲が限定される。犯行現場を突き止められれば、そこから犯人を手繰^{たづな}る糸口をつかめるかもしれない。

ホテル宿泊客の協力を取り付けて、二千五百の全室、七十の宴会場、各種食堂、バー、地下のアーケード街、建物をめぐる一万五千坪の庭園、ガーデンハウス、東屋、駐車場に至るまで、限なく搜索され

た。

しかしながら、犯行現場とおぼしき場所は発見されなかったのである。内部に痕跡がなければ、当然外部から来たと考えなければならない。ロイヤルホテルは地理的に東京の中心部に位置している。文字どおりの「都心」である。被害者は、いったい大東京のどこから瀕死の重傷を負った身体をここまで引きずって来たのか？

この捜索の間に、被害者の解剖の結果が出た。それによると推定犯行時間は、死体となって発見された時点より三十分ないし一時間遡る、すなわち九月十七日午後八時から八時三十分の間、凶器は右前胸部に刺しこまれ、その先端は肺臓を傷つけ、肺動脈に達している。傷口を凶器が蓋した形になっていたために、筋肉が凶器に巻きついてますます開口部を閉塞し、胸腔内に多量の血液が貯溜してこれが死因となったとみられた。

これだけの傷を負いながら、屋上レストランまでやって来た行動能力の残されていたことに、執刀した医者は驚嘆した。文献には心臓に負傷して二百〇五メートル歩行したという事例や、数日〇数週間生存した特例が報告されているが、現実にはきわめて稀である。

心臓よりも、太い動脈を切った場合のほうが、受傷後の行動能力が短いことが多いが、それも個々の傷の具合によって異なる。

凶器は、刃渡り八センチほどのありふれたナイフで、力をこめて刺しこまれたために長さ十二センチほどの刺創管を形成し、その先端が肺動脈を傷つけていた。

もちろん犯人の唯一の遺留品たる凶器の線からも、捜査は進められていたが、学童でももっていそうな平凡なナイフなので、初めから難航した。柄に付着していたにちがいない犯人の指紋も、その上から被害者が血まみれの手で握りしめたために、検出不能になっていた。

被害者の身許は、所持していたパスポートから直ちに割れた。それによると、アメリカ国籍のジョニ

ー・ヘイワード、二十四歳、現住所はニューヨーク、東一二三ストリート一六七番地、日本へは「観光ビザ」で、四日前の九月十三日に入国している。来日は今回が初めてである。

さらに所持品の中に新宿区のあるホテルのロケーションカードを見つけた。刑事がおもむくと、それは一年ほど前にオープンしたビジネスホテルで、機能本位の設備がうけて、現代に即応するホテルとして繁盛している。

その名も、ずばり、『東京ビジネスマンホテル』である。玄関からロビーへ入ると、フロントカウンタ―にクラークが一人、客が二、三人いるだけで、ガランとしている。これでホテルは満室なのだそうです。案内のボーイも置かず、客は前払いしてキーをもらい、部屋に通る仕組みになっている。

ロビーには、自動販売機がずらりと並んでいる。煙草、コーラ、週刊誌等の他に、おにぎり、サンドイッチ、ラーメンなどのスナック類の販売機がある。フロントでキーをもらい、自動販売機からサンドイッチとコーラでも買って、独り部屋で食事をしている図は、機能的かもしれないが、いかにも寒々としている。

従業員の数もおもいきって削減し、ホテルの隅々まで省力が行きわたっているようである。客室以外に事務所もあるらしく、『郡陽平後援会本部』とか、『松原法律事務所』などのボードが玄関脇の壁に下っている。

捜査員は、フロントで用件を伝えた。すでに宿泊客が殺害された連絡はきているので、クラークは奥のオフィスから責任者らしい人物を呼んで来た。

「どうもこの度は、私どものお客様が大変なことになります、私どもただびくくりしております」
〈フロント課長〉と肩書の付いた名刺を差し出したその男は、いかにも接客業で鍛え上げたようなこやかな態度で捜査員を迎えた。柔らかいが、芯に警戒の鎧を着けている。接客業者特有の「垣根越しの応対」なのである。

「そのことで、二、三おうかがいしたいことがありますて」、捜査員は前置き抜きで本題に入った。この職業畑の人間は、いったん口を開ざすと、テコでも開けられなくなる。警戒心を解くためにも、単刀直入に聞いたほうが、効果の高い場合が多い。

「どんなことでございましょう。手前どもにお役に立つことでしたら、なんなりと」

フロント課長は口では積極的な協力の姿勢をしめしながら、保身のおよび腰で、いつでも逃げられるように構えている。

「まず、殺されたジョニー・ヘイワードさんの部屋を見せていただきます。部屋はそのままになっているでしょうね」

犯行現場そのものではないので、強制的な保存はできないが、身許判明と同時にホテルに連絡し、もよりの派出所の巡査を走らせて、みだりに変更できないように見張らせてある。

「それはもう。交番から巡査も来ておりますし」

そのとき、派出所から先行していた巡査が一行を迎えに出て来た。案内された部屋は、ベッド一基と、ユニット式のバス・トイレットで構成された殺風景なシングルルームである。ベッドサイドにナイトテーブルがあり、そのうえに電話機が乗っている。それだけが部屋の備品であった。

「客の荷物は？」

「こちらにございます」

フロント課長は、部屋の隅にあった古ぼけたスーツケースを指した。

「これだけですか？」

「これだけです」

「中を見せてもらいます」

返事も聞かずに捜査員は、ケースを開いた。錠はかかっていなかった。中身は、着替えや軽い読み物